

Jules Pascin

ジュール・パスキン (1885-1930)



作品名 裸女 1923年作

種類 格子パネルにキャンバス

サイズ 57.8×47.0 cm ※鑑定書 Comite`Pascin

展覧会歴 1957年2月 京都市美術館【西洋美術名作展】作品裏に同シール

略 歴

ジュール・パスキン (Jules Pascin、本名 ユリウス・モルデカイ・ピンカス (Julius Mordecai Pincas)、1885年3月31日 - 1930年6月5日) はブルガリア人の画家。エコール・ド・パリ全盛の1920年代、モンパルナスで華やかな浪費生活をし「モンパルナスの王子」の異名を得た。「パスキン」は、本名のピンカスのアナグラム。ブルガリアのヴィディンに穀物商を営む裕福なセファルディム系ユダヤ人一家に生まれる。1902年、ヨーロッパや北アフリカ、アメリカなどを旅行。

ウィーン、ミュンヘン、ベルリンなどでデッサンを学ぶ。ミュンヘンで「ジンプリツィシムス」の挿絵画家として専属契約を結び、早くも素描家として高い評価を得る。1905年にパリへ移住。本格的に油画に取り組む。この年から「パスキン」の名を用いるようになる。サロン・ドートノンヌやアンデパンダン展に作品を発表する。

1913年にニューヨークで行われた大規模な展覧会「アーモリー・ショー」に選抜され出展（アーモリー・ショーはアメリカで初めて本格的にヨーロッパのモダンアートが紹介された展覧会。デュシャンが『階段を降りる裸体No.2』を出展し名声を博した）。1914年、第1次世界大戦を逃れてロンドンへ。

ニューヨークへ行き展覧会に出品。具象的な作品を描き始める。その後、フロリダ、キューバへ行く。1918年にエルミヌ・ダヴィットと結婚し、アメリカの国籍を取得。第1次世界大戦終結後の1921年、パリのモンマルトルに居を定める。独自の画風を確立し、成熟期を迎える。カフェの「ル・ドーム兄弟」や「ラ・クーポール」やナイトクラブを舞台に、彼の取り巻き数十人を引き連れて浪費を繰り返すなど華やかな社交生活を送るも、アルコール依存症と鬱病に苦しむようになる。そして、友人でノルウェー人画家のペル・クログの妻のリュシーと不倫関係になるが、酒と麻薬にまみれた自堕落な生活が原因で別れる。1930年6月5日、自宅アトリエの浴槽で手首を切ったうえ、首を吊って自殺。ドアに血文字で「ADIEU LUCY」（さよなら、リュシー）と書かれていた。パスキンの葬儀が行われた6月7日、パリのすべてのギャラリーは閉じて喪に服した。サントゥアン墓地までの5km近い道のを何千人もの知人がパスキンの棺の後に列を成したという。彼の遺体は一年後、モンパルナス墓地に再埋葬された。